

高知県立美術館

プレスリリース／2025年4月5日

英国王室に咲く

ボタニカルアートとウェッジウッド

～植物画のおいたち～

Botanical Art and Wedgwood

ジョセフ・ダルトン・フッカー、ウォルター・フッド・フィッチ
《マグノリア・カンパリイ(モクレン科)》
Photo Brain Trust Inc.



展覧会の主旨	美しい花々の咲く庭園、優美な花柄があしらわれたインテリアなど、今日の英国の暮らしに草花は欠かせない存在です。北方に位置しかつて限られた植物しか自生しなかった英国の人々は、世界の花々を飽くなき探究心をもって追い求めました。本展では、英国で大きく隆盛した植物学とボタニカルアート(植物画)から、その象徴ともいえる植物図鑑『カーティス・ボタニカル・マガジン』を中心に、大国として発展した英国の一面を辿ります。 1760年に即位したジョージ3世と王妃シャーロットの治世は、世界各地の植物収集や国内の庭園整備などを英国王室が支援したことで、王室と植物学に深い繋がりが生まれた時代でした。シャーロット王妃は、自身も植物画を学び、熱心に植物学に傾倒したことで知られています。 1787年に『カーティス・ボタニカル・マガジン』が創刊されると、植物画は学者や貴族のみならず市民の手にも渡るようになりました。一点一点手彩色された花々は、カラー印刷・写真のないこの時代の人々の暮らしを彩り、彼らの教養の底上げにも寄与しました。 植物画を愛したシャーロット王妃は、一方では陶磁器産業の発展にも貢献しました。1759年にジョサイア・ウェッジウッドが創業したウェッジウッドの製品を注文した王妃は、「クイーンズウェア(女王の陶器)」の称号を与えて同社を王室御用達として庇護しました。 こうした調度品の中には、ジョサイアの息子ジョン・ウェッジウッドの提案で生まれた「ダーウィンリリー」をはじめ、しばしば植物の姿がとり入れられました。英国では草花を用いたデザインが数多く生まれていますが、その背景には英国人の植物への憧れを感じずにはいられません。珍しい花々を初めて目にした当時の人々に思いを馳せつつ、色とりどりの植物の姿をお楽しみください。
出品内容	この展覧会は7つのパートで構成されています。 I 英国王室が愛した花々ー植物画の夜明け 1066年、ノルマンディー公ウィリアム1世の即位で発した英国。18世紀には世界各地の植民地から様々な物資が移入され、インドや熱帯圏の天産物への関心が高まり、観賞を目的とした植物にも広がっていきました。 植物園だけでなく、植物画が人気を集めると画集や雑誌も刊行されます。 1760年に即位したジョージ3世は、田園生活を楽しみ農業を愛しました。ドイツ

生まれの公女ソフィア・シャーロットと結婚し、家族でキュー・ガーデンに過ごした日々は複数の絵画に残されています。
キュー・ガーデンはヴィクトリア女王の時代となってから林業省に移され、広く国民に開放されるようになりました。

II 植物図鑑『カーティス・ボタニカル・マガジン』

手彩色の植物図を多数掲載したウィリアム・カーティスの『ボタニカル・マガジン』は、多くの購読者を獲得しました。1787年の創刊から今日まで235年以上続いています。紹介した図版は、1948年の164号までが9,688、165巻以降の180巻で6,600を超えます。

III ジョセフ・フッカーのヒマラヤ探検

ジョセフ・ダルトン・フッカーはグラスゴー大学を卒業した後、南極海地域の探検に加わり、タスマニアやニュージーランドなどを踏査します。彼は世界をリードする植物学者のひとりになりました。

1865年にはキュー王立植物園長に就任し、1873年からはロイヤル・アカデミー総裁も務めています。また、友人でもあるチャールズ・ダーウィンの進化論の普及にも貢献しました。

インド亜大陸の植物相を集大成した『インド植物誌』は、全7巻からなる、4,000ページを超える大著でした。彼のヒマラヤ調査も『ヒマラヤ紀行』として出版されています。

IV シャーロット王妃とウェッジウッド

ウェッジウッドは、1759年にジョサイア・ウェッジウッドによって設立されています。ジョサイアはエナメルを用いたクリーム色の陶器を完成させ、シャーロット王妃に献上し、1765年には女王の陶器を意味する「クイーンズウェア」の名称使用が許可されました。ウェッジウッドの陶器は、ヨーロッパを中心とした世界各国の王室等にとどまらず、広く中間階級にまで普及しました。

進化論を唱えたチャールズ・ダーウィンはウェッジウッドと親戚の関係にあり、ダーウィンの研究に集中できたのは、ウェッジウッド家の支援があったからともいわれています。

V ヨーロッパの植物画

肖像画のように精密に描いた植物画は、ルネサンス精神の延長線上にある近代の産物といえます。つまり、科学性と芸術性を重んじたボタニカルアートが登場するのは18世紀中葉のことでした。ヨーロッパにアフリカや中東などから未知の植物が多数もたらされると、植物学者はこうした植物を研究し、植物を正確に描く植物画家が登場しました。この章では、シデナム・ティースト・エドワーズやフリードリッヒ・ゴットロープ・ハイネ、ピエール・ジャン・フランソワ・テュルパンらが描いた名品をご紹介します。

VI 人々を魅了するバラ

ギリシア時代からバラは特別な花と見做され、高貴かつ清冽なイメージが浸透していました。やがて、純潔を象徴する花となり、さらに、熱情や献身、そして秘密のシンボルにもなっています。バラの野生種のうち、現代の栽培品種の作出に貢献したのはわずか8種に過ぎないといわれています。またバラの栽培に熱中したヨーロッパでさえ、19世紀初頭に栽培されていたバラは、お互いに似通った品種だったとされています。その後、中国からコウシンバラが導入され、さまざまな交配された結果、今日にみる多様な栽培品種が誕生しました。

	1867年には、異種間の交配で作出された品種同士の交配で、完全に人工のバラ「ラ・フランス」が登場し、この年を境に「オールド・ガーデン・ローズ」と「モダン・ガーデン・ローズ」に区分されています。 VII 暮らしを彩る花々 かつての英国では生きた草花を室内に持ち込むことが禁じられていたようです。そのため、花を描いた絵画を壁に飾ったり、カーテンやベッドカバーなどのデザインに用いたりして、少しでも花が身近になるように努めました。 ウィリアム・モリスは、産業革命によって大量生産の商品が溢れるようになった反面、かつての職人は軽視されるようになり、労働の喜びや手仕事の美しさも失われてしまったと考えました。また芸術と生活を統一することに心を砕きます。そうした思想を表した仕事に、植物を模様に取り入れたテキスタイルや壁紙、タペストリーなどがあり、さらには高いクオリティのインテリア製品や書物が生み出されました。 【特別展示:西洋の植物図譜と牧野富太郎】 日本の植物分類学の基礎を築いた牧野富太郎博士は、植物画の名手としても知られ、植物への愛に溢れる多数の画を残しています。その作品は、本展でご紹介した『カーティス・ボタニカル・マガジン』をはじめ、西洋の植物図譜から大きな影響を受けています。高知県立牧野植物園のご協力により、高知会場だけの特別展示として、牧野博士による植物画をご紹介します。その生き生きとした美しさ、そして西洋の植物画との共通点や、博士ならではの細かい描写をご覧ください。
主催・会場	高知県立美術館(公益財団法人高知県文化財団)、KUTV テレビ高知
会期・開館時間	2025年4月24日(木)～ 6月29日(日)会期中無休 9:00～17:00(入場は16:30まで)
観覧料	一般前売 1,040 円、一般当日 1,300 円(1,040 円)、大学生 900 円(720 円)、高校生以下無料 【前売券販売所】県立美術館ミュージアムショップ、金高堂書店本店、サニーマート(毎日屋、一部店舗を除く)、こうち生活協同組合(コープよしだ、コープかもべ)、県庁生協売店、ローソンチケット ●()内は20名以上の団体料金。 ●年間観覧券所持者は無料。 ●身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳及び被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)、高知県及び高知市長寿手帳所持者は無料。
協力	フィスカース ジャパン株式会社、高知県立牧野植物園
後援	ブリティッシュ・カウンシル、高知県教育委員会、高知市教育委員会、高知新聞社、KCB高知ケーブルテレビ、エフエム高知、高知シティFM放送
企画協力	株式会社ブレントラスト
交通案内	●とさでん交道路面電車「はりまや橋」から「ごめん」「領石通」または「文珠通」行きで15分、「県立美術館通」下車徒歩5分。 ●高知龍馬空港からは、高知市内一空港間を結ぶとさでん交通の空港連絡バスが

	ご利用いただけます。バス停「葛島」で下車徒歩約15分。 ●車・タクシーをご利用の場合は、JR高知駅から20分、高知龍馬空港からは20分、高知ICから10分(高知東部自動車道方面からは降りられません)、高知中央ICから3分、高知南ICから10分。
会期中の催しもの	- 講演会「英国ボタニカルアートの歩み」 展覧会の監修者の東京大学名誉教授・大場秀章先生に英国の植物学と植物画についてお話しいただきます。 日時:5月11日(日) 14:00-15:30(予定) 会場:1 階講義室 参加費:無料 *事前予約不要 - ギャラリートーク 担当学芸員が本展の見どころをご紹介します。 日時:5月25日(日)、6月15日(日) 13:00-14:00 集合場所:本展第1 会場前(要当日観覧券) - サタデー・レクチャー「英国のガーデニング文化」 日時:6月7日(土) 14:00-15:30 会場:1 階講義室 講師:奥野克仁(当館学芸員) *事前予約不要 - ティーチャーズ・ウィーク 期間中、高知県内の教職員の方(図工・美術以外も含む)は本展及びコレクション展を無料でご覧いただけます。希望者には学校での美術館利用についてのご相談も承ります。 期間:5月1日(木)-7日(水) 要予約 申込:お電話(088-866-8000)にて4月30日までにお申し込みください。 - ベビーフレンドリーアワー 主に 0~2 歳児と保護者が気兼ねなく、安心して鑑賞できるよう配慮した時間です。時間内いつでもお越しください。 10:30 と 11:30 より参加自由のミニギャラリートーク有り。 日時:6月19日(木) 9:30-12:00 *要当日観覧券 定員:各回 5 組(きょうだい児も参加可) 申込:お電話(088-866-8000)か申込フォームにて開催前日までにお申し込みください。 - ボタニカルティー作りのワークショップ 花びらなどを使ったオリジナルティーを作り、楽しいティータイムを過ごしてみませんか。 日時:5 月 16 日(金)、5 月 17 日(土)、6 月 20 日(金)、6 月 21 日(土) 各日 午前の部(11:00-12:30)、午後の部(14:00-15:30) 講師:松崎亜紀子(日本紅茶協会ティーインストラクター) 定員:各回 10 名(先着順) 会場:ミュージアムカフェ・マルク

	参加費:3,000 円(プチケーキ、焼菓子付き) 申込:ミュージアムカフェ・マルクに電話(088-866-5565)にてお申し込みください。 7. ミュージアムカフェ・マルク 英国フェア開催! 会期中、英国発祥のアフタヌーンティー(紅茶と焼菓子等のセット)を販売します。
取材のご依頼 広報に関する 問い合わせ	高知県立美術館(展覧会企画担当:学芸課 奥野克仁/長山美緒) 〒781-8123 高知市高須353-2 TEL:088-866-8000 FAX:088-866-8008

広報用図版	ご希望の画像の番号をお知らせください。 必ず下記のキャプションもご掲載ください(下線部必須)。 掲載にあたり、作品のトリミングは可能です。	
(図版1) <u>ピーター・ヘンダーソン</u> <u>《ゲットウ(ショウガ科)》</u> 1801 年 銅版、手彩色、紙 Photo Brain Trust Inc.		ロバート・ジョン・ソートンが出版した植物画集『フローラの神殿』は植物画史において独創的な作品として人気が高い。図版を制作したのは植物画の専門家ではなく、ピーター・ヘンダーソンら当時の流行画家たちであった。 一般的な植物画では、植物の特徴、また類似種との相異部分などを図示するため、画面の中央には花あるいは果実が描かれ、それに加え全形がわかるように葉や茎などを描くことが多かった。 『フローラの神殿』は花をロマン的な風景とともに描き、豪華な図版として仕上げているが、植物の描写はきわめて正確である。
(図版2) <u>シデナム・ティースト・エドワーズ</u> <u>《イクシア・チネンシス(アヤメ科)》</u> 1792 年 銅版、手彩色、紙 Photo Brain Trust Inc.		幼少時から植物と昆虫を描く才能に優れたエドワーズはロンドンで研鑽を深め、カーティスの『ボタニカル・マガジン』と『ロンドン植物誌』に画作を発表している。その他にも、『ニュー・ボタニック・ガーデン』や『ボタニカル・レジスター』にも画作を残している。さらに、彼は鳥類やその他の動物も描いている。 植物画では写実性に優れ、多くは花や花序が葉と共に描かれるが、地花部だけでなく茎の下方の部分も省略された、花束画の作品が多い。

(図版 3) <u>《ライラック(モクセイ科)》</u> 1793 年 銅版、手彩色、紙 <u>Photo Brain Trust Inc.</u>		和名をムラサキハシドイという。ヨーロッパ南東部からコーカサスを経てバルカン半島に分布する。ライラックと通称される花木を代表する種で、17～18 世紀にはヨーロッパの絵画にも描かれている。日本には明治時代中頃に渡来した。低木または小高木で樹高は 4～8mになる。花は初夏で、花色は変化に富み、芳香がある。
(図版 4) <u>シデナム・ティースト・エドワーズ</u> <u>《パンクラティウム・アマンカス(イスマンカ)</u> <u>メンアマンカ)(ヒガンバナ科)》</u> 1809 年 銅版、手彩色、紙 <u>Photo Brain Trust Inc.</u>		南アメリカのチリとペルーにまたがるアマンケス丘陵に分布する。現在では多くの学者は本種をヒメノカリス属 (Hymenocallis) に分類する。同属中黄色花をもつのは本種のみである。葉は剣状で、長さ 50cm にもなる。花被片は基部で合着して筒状となる。雄しべの下部は膜質の幅花冠と結合してカップ状になる。
(図版 5) <u>ジョセフ・ダルトン・フッカー</u> <u>ウォルター・フッド・フィッチ</u> <u>《マグノリア・カンベリイ(モクレン科)》</u> 1855 年 リトグラフ、手彩色、紙 <u>Photo Brain Trust Inc.</u>		中型から大型の落葉高木で、樹高は 30m、ときに 45m になる。樹皮は滑らかで灰色を帯びる。葉は広楕円形で、長さ 10～23cm、幅 4.5～10cm で、先は鋭形、裏面は粗渋になる。花はホオノキに似て大型で、直径 15～25cm になり、12～16 個の白または暗紅色の花被片を有する。花は早春、開葉前に咲く。ネパール東部、インド(シッキム、アッサム)、ミャンマー北東部、中国南西部に分布する。

(図版 6) <u>ウェッジウッド</u> <u>《蓋付き深皿(クイーンズウェア)》</u> 1765-95 年頃 クリームウェア(陶器)、エナメル彩 <u>Photo Michael Whiteway</u>		「イギリスの陶工の父」とも呼ばれているジョサイア・ウェッジウッドが創設したウェッジウッドは、1760 年代に乳白色の地肌の陶器クリームウェアを開発した。1765 年に当時のシャーロット王妃に献上して賞賛を得て、王妃からこの陶器をクイーンズウェア(女王の陶器)と称することを許可されている。 クイーンズウェアは、素地そのものが上品な美しさを持ち、実用においても魅力を失うことなく、テーブルに光彩を放つ。
(図版 7) <u>ウェッジウッド</u> <u>《蓋付き深皿、玉杓子(クイーンズウェア)》</u> 1800 年頃 クリームウェア(陶器) <u>Photo Michael Whiteway</u>		シャーロット王妃からの後援を機に、ウェッジウッドの名は各国の王侯貴族に知られるようになり、ロシアのエカテリーナ2世などから注文が相次いだ。 クリームウェアは国内外で広く注目され愛用されて、今日に至っている。
(図版 8) <u>ウェッジウッド</u> <u>《ポートランドの壺》</u> 19 世紀(1790 年デザイン) ジャスパーウェア(炆器) <u>Photo Michael Whiteway</u>		ジョサイア・ウェッジウッドは古代ローマのカメオ・グラスの傑作「ポートランドの壺」(1 世紀頃)をジャスパーウェアで再現することに努めた。第2代ポートランド伯爵夫人が購入したことに由来するこの壺のオリジナルは、後に大英博物館における最も重要な収蔵品となっている。 オリジナルのカメオ・グラスの質感や深い青色などをジャスパーで再現することは困難を極めたが、ジョサイアは試行錯誤の末、1790 年にその再現に成功した。
(図版 9) <u>ウェッジウッド</u> <u>《平皿「ダーウィン・ウォーター・リリー」(ダーウィン・サービスより)》</u> 1808-11 年 アースンウェア(陶器)、エナメル彩 <u>Photo Michael Whiteway</u>		ジョサイアの長男で、王立園芸協会の初代会長であったジョン・ウェッジウッドが提案した図案と言われる。1879 年に開催されたウェッジウッド社の展覧会カタログでは、この植物を「スイレン」としているが、主要なモデルとなったのは「ハス」のようである。 19 世紀初頭の英国では、海外から初めて輸入されるエキゾチックな植物に大きな関心が寄せられていたが、ハスもその頃に東アジアから到来した。ダーウィンもこのセットを所有していたと言われる。

(図版 10) <u>ウェッジウッド</u> <u>《ティーカップ&ソーサー「ジャパン・パターン」》</u> 1810 年頃 アースンウエア(陶器)、エナメル彩 <u>Photo Michael Whiteway</u>		ウェッジウッドでは 19 世紀初頭から「ジャパン・パターン」と呼ばれる文様の陶器が多数制作された。日本風のデザインはロンドンのショールームでは人気のあった柄だったようで、本作は、同社の見本帳で「ジャパン・パターンの7番」として記録されている。名称は「ジャパン」としているが東洋という意味に過ぎず、中国風の雰囲気も感じられる。
(図版 11) <u>ウースター</u> <u>《ティー・セット「クイーン・シャーロット・パターン」》</u> 1755-75 年頃 磁器、金彩、エナメル彩 <u>Photo Brain Trust Inc.</u>		ウースターは 1751 年にジョン・ウォールらがウースターシャーに設立した英国で最も長い歴史を持つ磁器工場である。薄手で実用性の高い製品で知られ、銅版転写など、新技術の開発にも積極的であった。1789 年にはジョージ 3 世から「王室御用達」の勅許を得ており、この際に工場を訪れたシャーロット王妃にちなんで「ロイヤル・リリー」あるいは「シャーロット・パターン」と呼ばれる文様が生まれた。
(図版 12) <u>《モス・ローズ(バラ科)》</u> 1788 年 銅版、手彩色、紙 <u>Photo Brain Trust Inc.</u>		バラの栽培種のひとつ。英名を Moss rose という。花は八重咲きで、ローズ・ピンクの多数の花弁からなる。花柄と萼片にはまるで苔むしたように腺状毛が密生する。多種のバラの複雑な交配から誕生した、ロサ・ケンティフォリアとダマスクバラの雑種から誕生したと推定されている。主要な栽培品種は 1850 年から 1870 年の間に登場した。本作はこのバラ、モス・ローズの最初の図解だとみられている。
(図版 13) <u>ピエール＝ジョゼフ・ルドゥーテ</u> <u>《バラ「アメリ」(バラ科)》</u> 1843 年 銅版、手彩色、紙 <u>Photo Brain Trust Inc.</u>		南ネーデルラント(現ベルギー)の代々多くの画家を輩出した家庭に生まれたルドゥーテは、幼い頃から画才を発揮していたが、パリの兄の工房で修業中に植物画家ヘーラルト・ファン・スパーンドルクに才能を見出され、植物画の世界に進んだ。「バラの画家」「花の画家」として知られ、ルイ 16 世の王妃マリー・アントワネットの蒐集室付素描画家、ナポレオン 1 世の宮廷画家として自然史博物館付植物画家・図画講師を歴任した。